

要約

「モダンガール」の歴史社会学 —国際都市上海の女性誌『玲瓏』を中心に—

本論文は、「モダンガール」という女性表象を半植民地主義の視点から捉え直し、近代中国におけるトランスナショナルな女らしさの構築メカニズムを探究するものである。

中国で「モダンガール」を意味する「摩登女」「摩登女子」「摩登姑娘」「摩登女郎」などの言葉や、それらに名指される女性主体ないし大衆的なモダン風俗が社会現象化したのは、1920年代末からであり、そして1937年の日中全面戦争勃発により一段落した。この時期はまた、国民党南京政権が樹立され、国民国家プロジェクトに向けて母性主義が推し進められていく時期にあたっている。しかし、最終的に抗戦前中国において性別役割分業が固定化しなかったという通説があるように、当時、女らしさの形成は葛藤に満ちたプロセスであった。この場合、「母」に対して垂流で逸脱的な「モダンガール」という女性カテゴリーの生成こそ、そうした屈折した過程をより鮮明に描いてくれる恰好の切り口になると考えられる。

よって、本論文では、該当時期に中国モダンガールの発祥地である上海で生まれた代表的な女性誌『玲瓏』を主たる分析対象に、母性主義イデオロギーを相対化する視線を読み解きつつ、女らしさの形成に関わるトランスナショナルな文脈を明らかにしていく。

まず序章「国際都市上海の『モダンガール』」では、先行研究の検討を通して本論文の視座・対象・方法を提示する。2000年代以降、「モダンガール」を世界同時多発的な現象として捉える国際共同研究の発足により、それまで一国史の枠内で行われてきた中国モダンガールに関する研究が、国際環境を重視するようになった。なかでも、外国人居留区が広がり、50ヵ国以上の外国人が集まった国際都市上海が対象地域として注目を集めている。しかし、「グローバリゼーション」あるいは「植民地的近代」という先行研究が取り上げた視点について、それぞれ欠落した点が指摘できる。前者では、世界中の各地域間の同時代性が強調されるあまり、近代における不均衡な文化連鎖や、その核心にある植民地主義の分析が後景に追いやられている。また後者の枠組みでは、あらかじめ被植民者/植民者といった対立項が想定されていたため、多数の列強勢力が混在し、それらの勢力との連帯と対立が重層的に絡み合っていた上海の文化状況を捉えるうえでは不十分である。

そこで本論文では、「半植民地主義」という分析概念を採用する。この概念は、多層的な植民支配によって逆説的に被支配層にもたらされる選択の余地、すなわち主体の能動性に分析の重点を置いている。近年の文学研究と文化史研究で応用されつつあり、政党および植民勢力が多面的だった上海において、民族主義と植民地主義の両方に対する曖昧な態度を解明するうえで活用されてきた。

ただし、本論文は、「モダンガール」という女性表象に注目することからジェンダーの視点を重視する点、また植民勢力のなかで「西洋」のみならず、「日本」にも目配りする

点において、従来の研究に新しい知見を貢献することができる。

分析資料は、女性誌『玲瓏』を中心に取り上げる。「モダンガール」を創出するメディアのなかで、女性誌に着目するのは、それが「女性メディア」の側面を持ち、女性の現実と表象の駆け引きの場として位置付けられるからである。とくに戦前の情報環境のなかで、より広範な女性の声を拾い上げることができる限られたメディアの一つでもあったため、「モダンガール」に関する女性の自己表現を明らかにするうえで看過できない資料である。『玲瓏』は、同時代の女性誌のなかで、刊行期間が長く、発行部数が多かっただけでなく、それ自体と版元である三和出版社が「上海モダン」の創出において重要な位置を占めていた。加えて、(1) 上述の「女性メディア」としての特質を典型的に示す媒体、(2) 「モダン〔摩登〕」への言及が最も頻繁であり、多国のモダン文化との交渉が確認できるといった点から、本論文の目的にふさわしい分析対象であると考えられる。

分析にあたり、本論文は、構築主義的な歴史社会学研究の立場を採用し、「モダンガール」を実在の女性類型としてではなく、言説による社会的構築物であると捉える。とくに表象と実態の循環的な連環の間に生じた齟齬やずれこそ、「ポリティクスとしての表象」の可能性を生み出すということを鑑みて、「モダンガール」がいかなる表象戦略のもとでメインストリームである母性主義のオルタナティブを形成し、半植民地上海のジェンダー秩序の一側面を投射しているのかについて考察を行う。

まず第1章では『玲瓏』が女性中心の言説空間として成立するプロセスを、1920年末からの女性読者層の変動との関わりで把握したうえで、第2-5章では誌面における「モダンガール」の表象のされ方を検討する。

第1章「女性中心の言説空間の誕生：『玲瓏』の創刊」では、モダンガール表象の生産と流通に大きく寄与した「女性メディア」としての女性誌の確立について、『玲瓏』の創刊経緯に注目しながら検討する。

従来、女性誌といえば、「女性向け」という側面がほとんど自明視されてきた。しかし、それを成り立たせるために、女子教育の成長による女性読者層の拡大が必要不可欠である。近代中国において、1920年代末までの女性誌は、むしろ男性知識人が女性問題を議論する場として機能することが多かった。1928年を境に、女子教育が飛躍的な発展を遂げていくと、新興の女学生読者層を獲得するために、「女性向け」にジェンダー化する女性誌が確立したわけである。本章では、その代表的な媒体が『玲瓏』であったことを、三和出版社が行った出版戦略から明らかにしていく。男性読者の排除、購買行為に対するジェンダー的な意味付与、そして読者のフェミニスト的な批判力の涵養といった営為を分析することにより、同誌の創刊が女性中心の言説空間の誕生を象徴するものであったことを示す。そのうえで、上海における「モダン」が、強烈な女性視点をも含んでいたことを併せて指摘する。

『玲瓏』が女性中心の言説空間であったことを踏まえ、第2-5章は女性視点のもとで、いかなる「モダンガール」が表象されているのかを詳しく見ていく。第2章『「モダンガール」を語る：外見的魅力の承認』では、「モダンガール」についての語りとその編成論

理を検討する。言論界に追随して「外見/内面」という対立項に基づくモダンガール批判も見られるが、そこには異なる2つの論理が存在する。一つは、既存の一夫一婦制の異性婚制度を維持すべく、「モダンガール」の性的逸脱を問題視する視点である。もう一つは、性的規範からの逸脱よりも、外見的魅力の強調によって女性が従属的なジェンダー関係に陥りかねないことを懸念する視点である。

本章の分析からは、後者の論が圧倒的に多く、すなわち制度面より、男女の交際実践における女性の地位確保がより意識されていたことが明らかになった。この論理のもとで、かえって積極的に異性と交流し、男女の自由交際を実践することが推奨され、また、外見を磨くこと自体、女性論者から完全に否定されないでいたことが明らかになった。このように女性の外見的魅力(=性的魅力)を肯定する視線は、五四運動以降の女らしさの回復の文脈において、先行研究が指摘する「母性」(=性的役割)とは異なる経路を辿っていたことを本章では指摘した。

第3章『モダンガール』を演じる：美しさ規範の形成』では、表紙を中心に「モダンガール」のビジュアルイメージを分析する。性別役割は日々の日常生活のなかで演じられることによって確立するものと言われるように、表紙写真に掲げられる「モダンガール」の身体イメージからは、そのジェンダー規範が読み取れるはずである。『玲瓏』の表紙におけるモダンガール表象において、自分を保護してくれる「母」と、未来像としての「母」のイメージはともに薄く、二重の「母親の不在」が確認できた。そのかわりに、誌面の豊富なファッション・美容記事から、女性の「美しさ規範」が形成されるのが見て取れ、外見を磨く努力は自己愛的な視線に基づいており、日常的な社会関係を広げるためだとみなされていた。ここでも「性的役割」と「性的魅力」の間の断絶が再確認できる。

第2-3章の分析を通して、性的魅力の発揚に女性の価値を見出すという理想的な「モダンガール」のイメージが浮かび上がってくる。続く第4-5章は、そうした特徴がトランスナショナルなまなざしのもとでどのように維持・促進されるのかを検討する。第4章「西洋への視線：『女性の独立国』としてのアメリカ」では、「モダンガール」の代表格とされるハリウッドの女優像を対象に、誌上のジェンダー構築における「西洋」の位置づけと機能を分析する。

オクシデンタリズムの視点からみれば、性的主体としてのハリウッド女優の前面化、また「ハリウッド」ないし「アメリカ」を「女の独立国」という虚構の文化統合体として捉えることは、「西洋」を流用し、現実の中国女性の閉塞感を逆照射する反体制的な表象戦略だと見ることができる。従来の「西洋」の反体制的な利用というのは、近代家族イデオロギーをもって儒教的な家父長制に抗う、いわば「西洋」に対して「父探し」の側面があると指摘されてきたが、本章の分析から明らかになるのは、女性自身が主体性と連帯を求める「姉妹探し」の衝動である。

第5章「日本への視線：『賢妻良母の国』を超えて」では、「日本」へのまなざしを踏まえつつ、それと関連する「モダンガール」の表象のされ方を分析する。日中間の衝突が深刻化する時代における上海の半植民性とジェンダーを捉えるうえで、「日本」は「西洋」

以上に避けては通れない変数であると考えられる。

分析を通して、まず「日本女性＝賢妻良母」というステレオタイプが『玲瓏』上で成立していることが明らかになった。そうした視点は、母性主義への抵抗を強化する点においては「反体制」であると同時に、日本の負の側面を際立たせる点においては「反日本」でもあった。こうした「二重抵抗」の構図は、いみじくも民族主義と植民地主義という中国女性に課された「二重抑圧」に対応する表象戦略であったといえる。一方、それを裏返すようなかたちで、誌上では性的魅力を発揮しつつ、民族主義と植民地主義のどちらにも安易に与しない境界侵犯的な「モガ」も登場していた。国籍が曖昧で正体不明な「女性スパイ」に象徴されるこの種の「モダンガール」は、半植民地における女性表象の異種混濁性を極限に反映するものであり、日本に占領されながらもなお「上海グレーズーン」と呼ばれる来たる時代につながっていくものである。

終章『『過渡の女性』としての上海モダンガール』では、これまでの分析で得た知見をとりまとめ、上海の半植民地主義とジェンダーについて考察を行う。

女性中心の言説空間『玲瓏』のなかの「モダンガール」を通して、母性主義イデオロギーが押し付けられるなかでも、上海の女性向けメディアにおいて性的魅力を正当化する表象戦略が維持されていたことが確認できる。それは母・妻役割といったような女性の性的役割と接続しているよりも、断絶があり、女らしさの分断を促進する側面がある。このようなジェンダーのあり方は、「西洋」や「日本」を流用しつつ、「反体制」の機能を果たすことができるため、民族主義と植民地主義のどちらの文脈にも収まりきれないという特徴をもつ。

本論文の結論部では、以上のような「モダンガール」を、「過渡の女性」として位置付けている。それは性的役割の固定化よりも流動化に、ナショナルなもの境界強化よりも境界侵犯に寄与する女性表象であるため、「過渡」の性格をもつ。「過渡の女性」としての上海モダンガールによって逆照射されるのは、メインストリームだった母性主義自体の混成的性格と、多層的な勢力間の相互牽制の可能性である。一見、亜流で逸脱的な「モダンガール」はこうして、上海の半植民地性とジェンダーの核心を突く存在であったともいえるのである。

「モダンガール」は民国期以後も消えることはなく、近現代中国の時代による変動を跡付ける重要な女性表象となっている。今後、時系列的に「モダンガール」に関するさらなる研究の展開が期待できるだろう。本論文は、その誕生の原点に立ち返り、現代中国の社会的現実ではしばしば捨象されがちな半植民地的状況とジェンダー形成のダイナミズムを歴史社会学的に探究した点において、意義があると考えられる。

(以上)